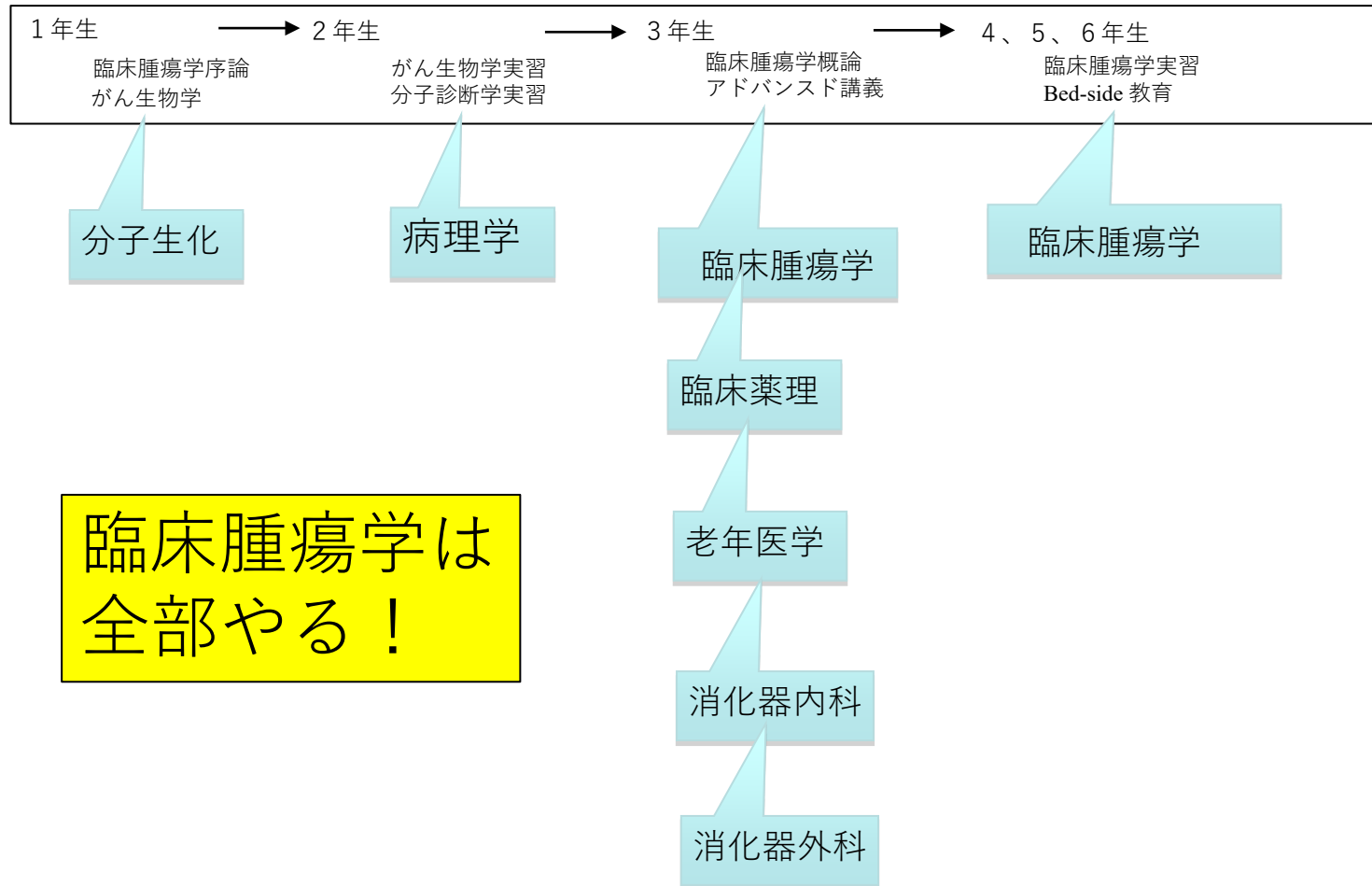


# 分子標的治療時代の臨床腫瘍学教育



人類的大命題  
国民的悲願

# がん制圧

新しい医師像—がん分子診療を

理解する。  
実践する。  
**創出**する。

イノベーションの必要性

(現状)がん治療に対する  
国民の期待との乖離

理論に基づく  
発見、発明の  
機運の高まり

医学部現行教育カリ  
(がん薬物療法は?)



治療成績の向上

分子診断  
分子治療



理論的治療へ

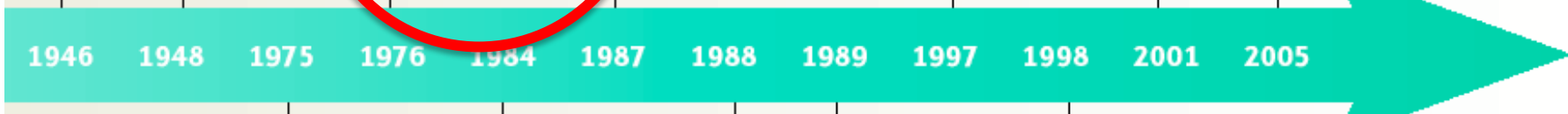
パラダイム  
シフト

がん生物学  
の  
成果

将来の医療人を  
どう養成するか

毒薬由来の治療法の時代

経験則に基づく治療



初めての  
抗がん剤

モノクローナル  
抗体

がん遺伝子の発見に続く  
がん分子生物学の革命期

がん分子標的治療の時代

良い医療の提供者として、自己実現できるように頑張ろう。  
(自分自身も、そうありたい)

- ・先入観がなく、ありのままに物事を捉えることができる
- ・客観的で判断力があり、感情的にならない
- ・超然としていて、不運に悩まない
- ・他人を助けることに幸福を感じる
- ・他人と自分を尊重できる
- ・勇気があり失敗を恐れない
- ・周りの意見に流されず、自分で意思決定ができる

**自己実現**(Self-Actualization、アブラハム・マズロー)

「自分に偽りなく好きなことをして、かつ、それが社会貢献になっているような状態」

# 秋田で撒いた種が、いつか、何処かで花開くだろう。

大 和 魂	留 め 置 か ま し	朽 ち ぬ と も	武 蔵 の 野 辺 に	身 は た と ひ
-------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------

吉田松陰

明治維新は成った。

吉田松陰の熱意が弟子に伝搬した。

\* 湯島の昌平黌にあらずして村塾。

安政の大獄に連座し斬首された村塾の師吉田松陰、享年30。

首斬浅右衛門、「安政6年に斬った武士の最期が一番立派であった。」

絶筆「留魂録」で己の人生を四季の農事の輪廻に喩えている。

「春、種を蒔き、夏、苗を植え、秋に収穫し、冬に貯蔵する。たとえ不作の年があっても、種を植え継ぐ人がいれば、それは絶えることなく、いつか実りを迎えることができる。」

一朝、美酒を醸すことができなくとも、連年種を蒔き続ける必要がある。